

氏 名 Tseveendorj Amarbayasgalan
学位の種類 博士（医学）
学位記番号 甲第402号
学位授与年月日 平成25年3月21日
審査委員 主査 教授 中村 守彦
副査 教授 富岡 治明
副査 教授 土屋 美加子

論文審査の結果の要旨

アトピー性皮膚炎は、その多くがアトピー素因を有する者に発症し、慢性的に湿疹病変を繰り返して生じる皮膚疾患である。本疾患の治療・管理においては、重症度に応じた治療計画を立てる必要がある。その全身的指標として、主観的評価のSCORing Atopic Dermatitis (SCORAD)や日本皮膚科学会の重症度基準があり、客観的評価には血清中のIgE値およびthymus- and activation-regulated chemokine (TARC) 値、末梢血好酸球数などの測定がある。しかしながら、外用療法の指標に利用できる局所病変の重症度を評価する客観的な指標は定まっていない。そこで申請者は、アトピー性皮膚炎の病態形成には、表皮で産生される炎症性サイトカインが重要な役割を担っていることに着目し、重症度の指標になる角層中のサイトカインを探索した。アトピー性皮膚炎患者および健常者の皮膚（上腕部、頸部、背部）からテープストリッピング法により角層を採取し、タンパク質を抽出後、28種のサイトカインを特異的ELISAにて定量評価した。次いで定量可能なサイトカインについて、局所病変の重症度および全身的な重症度をスコア化して関連性を検討した。また、角層水分量、経皮水分蒸散量、血清IgE値およびTARC値、末梢血好酸球数などとの関連性を合わせて評価した。その結果、検索したサイトカインのうち、interleukin-8 (IL-8)、IL-18、vascular endothelial growth factor、transforming growth factor- α が定量可能かつ病変部で有意に増加していることを認めた。これらのサイトカインと皮疹の重症度の関連性を検討した結果、IL-8が局所病変の重症度、全身的な重症度と最も高い相関を示した。このことは、角層中のIL-8の定量が、アトピー性皮膚炎の局所病変の客観的な重症度の指標になる可能性を強く示唆している。

以上より、本研究の成果は臨床的意義が大きく、学位授与に値すると判断した。